

---

# 大切な存在に

雲天道凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大切な存在に

### 【NZコード】

N4808Y

### 【作者名】

雲天道凪

### 【あらすじ】

家族もいなく施設で暮らす主人公凪鎖が、ある掲示板を見つけたことから始まった。そこには「銀行強盗する」という書き込みがあり、興味を引かれて行ってみると・・・

誰も信じられない。  
誰も相手にしてくれない・・・

ある日あたしは携帯である掲示板を見つけた。

その掲示板には凄く共感出来る人たちばかりで、皆一人ぼっちの人  
だった。

しばらくその掲示板にいる、田をひく書き込みが入った。  
<明日の正午みどり銀行で強盗をする>

あたしはその書き込みを見た瞬間。

胸が熱くなるのを感じた。

しばらく何も書き込みずに、掲示板を見ていると、皆あの書き込み  
には一切触れなかつた。  
きつと皆あたしと同じ気持ちなんだ。

翌日あたしは施設から逃げ出すようにして、銀行へと向かつた。  
あたしとほぼ同時に数人の女の子が銀行の前に着いた。  
何も言わなくともわかつた。  
昨日掲示板で話した子達だ。

銀行に入ろうとすると、中から鞄を持った女の子が出てきた。  
あたし達は重い鞄を皆で協力して持ち去つた。  
サイレン音がしていた。

警察・・・

『これからどうじよっか』  
『こんだけあるんだよ? 何だつて出来るよ』  
『でもさつき警察が来てた』  
『海外に逃げるとかわ?』  
『バレかけやうよ』  
『バレかけやうよ』  
『…』  
『…』  
『もう顔とかバレたのかなあ?』  
とりあえず畠の近くの倉庫に身を隠すこととした。  
『大丈夫だよ。だつて聞き込みしたつて誰もあたし達のことを何て知  
らないんだから』  
『そうだね…』  
『あたし何か買つてくれるよ』  
しかし・・・  
あたしは警察を侮つていた。  
『ンンビニから帰らうつとすると…』  
『畠那ちゃんなんだよね?』  
『えつ』  
あたしはすぐにこの男が警察だと察した。  
『違います…』  
急いでこの場を離れようとしたが、次の言葉であたしの動きが止め  
られてしまつ。  
『姫縞畠那ちゃんでしょう。あの一家惨殺事件の唯一の生き残りの…』  
語尾になるにつれ声が小さくなる刑事さん。  
もしかしてこの人は…・・・  
『國島刑事?』  
あたしが名前を呼ぶと、刑事は驚いたような、嬉しそうな表情をし

た。

『君がまさか覚えくれている何て・・・』

そして、刑事さんは少し暗い調子で言った。

『だけど君がまさか強盗をする何てね・・・』

その言葉であたしは今の状況を思い出したかのように走り出した。それと同時に向こうもハツとしたように追いかけてきた。

『待て』

運動何てまるでしていないのに、あたしは塀を越えたりして、樂々と刑事をまくことが出来た。

2年前のある日。

マダ中学2年生になつたばかりのあたしは、何と陸上部の短距離走で優勝することが出来た。

『家族の皆きっと喜ぶわよ』

今日の試合は神奈川県で行われた為、家族は見に来れなかつた。喜びと、期待を胸に家路を歩いた。

しかし、そんな喜びは、すぐに絶望へと変わつてしまつ。

『何の騒ぎ?』

家の前に凄い人だかりが出来ていた。

嫌な予感を感じながら、家へと近づいて行つた。

パトカーが何台か止まつていた。

足が震えるのを感じた。

何があつたの?

あたしはその場から逃げ出すように、走つた。

数M走つたところで、誰かが後ろから肩を掴んできた。

『君・・・もしかしてあそこの家の子かな?』

20代前半ぐらいの男は、きつちりとスースを来ていて、何処か初々しさを感じた。

『やうですけど・・・』

吐き捨てるように言ひ、男は少し悲しげに言つた。

『僕は東京警察署の國島つていいます。家族なら、何があつたのか伝えておくべきだと思つてね』

伝えなくていい。

聞きたくない。

そつ思つていいのこ、あたしは刑事に耳を傾けていた・・・

あの時の刑事に会つ何で・・・  
とりあえず場所を変えないと・・・

そして、あたしは走つて皆の元へと戻つた。

『もう警察に顔バレてるよ。皆少しづつ遠い所に行こう。4人いるから、一歩に別れていい』

あたしは、この中で一番年上の女の子と行動を共にした。  
皆どんな思いでここに来たんだろう?。

『あのや・・・』

歩きながら尋ねよつとしだが、どう聞いていいのかわからず、口こもつてしまつ。

『何でお前みたいな真面目そうな奴が来たんだ?』

あたしより先に相手が尋ねてきた。

尋ねられると何も言えなくなるものだ。

『まあ、言いたくなきやいいけど・・・』

それから一人共何も話さず、しばらく歩いていた。

『あたしは・・・きっと誰かに見てほしかつたのかもしれない。あたしの存在を・・・』

あたしが話し始めると、足を止めた。

『そうか。あたいはある奴を困らせたくて、否・・・迷惑かけたかっただ。あたい愛つていうんだ。あんたは?』

『凪那・・・皆何か抱えて生きているんだよね』

二人でしんみりとしていると、嫌な予感が走った。

周りを見渡すと・・・

『警察!-!』

その言葉を合図に二人は走り出した。

ようやく振り切った時には、愛とは離ればなれになっていた。  
結局一人なのかな・・・  
あたしはどうして逃げているんだろう?  
あたしは捕まりたくないのか?  
でも、どうだつていいはず・・・  
だつて、あたしは・・・

それから何日か、一人で歩き続けていた。

盗んだお金を皆で別けた分もあり、自販機で養うことが出来た。

『冂那ちゃん』

『あつ・・・』

國島刑事でも、刑事は刑事だ。

『さすが、昔は陸上部なだけあつて、速いな』

何だか追いかけっこをしてるみたいで、楽しくなつた。

弟がよくあたしを追いかけてきて、あたし逃げてばかりだつたな・・・

・  
『あたしに追いつけますか?』

楽しげに挑発しながら、走り回る。どうしてこんなに走れるのだろうか?

しばらくすると、もう追いかけてくる気配はなかつた。國島刑事もおじさんだな。

笑いながら歩いていると、一番身長の小さい女の子とあつた。

『あつ、良かつた。ずっと一人かと思つた。あたし沙希。あなたは

?』

『冂那』

こんな純粹そうな子が、何でここにいるんだろう・・・

『ねえ、凪那ちゃんはどうしてここに来たの？凪那ちゃん優しそうなのに・・・』

常に微笑を浮かべている沙希。

まるで自分の心を隠しているかのようだ・・・

『あたしは・・・誰かに相手にされたかった・・・かな？』

自分にも問い合わせながら言うと、沙希は微笑んでから、こいつ言った。

『うなんだ。そんな理由なんだ・・・』

沙希は安心したような、落胆したような顔をした。

何を期待し、沙希は何故ここに来たのか。

聞きたかったけど、聞けなかつた・・・

『この世の中。だから犯罪者が多いんだよ』

今度はとても悲しげに、ぽつりと呟いた。

しばらく沙希と歩いていると、主犯の子と会流出来了。

『無事だつたんですね』

おさげに眼鏡という、いかにも昔の学級委員長みたいな格好の子。

『あつ、あたし幸子つていいます。お二人は？』

『沙希と凪那』

名前を言つて合つと、誰も口を開こいつとせず、沈黙が続いた。

幸子が主犯だところだが、あまりにも信じられないからだ。

『後は愛だけだね。何処にいるんだろ？ね・・・』

『それより何処かで休憩しない？もうずっと歩きつぱなしですよ』

『そうだね』

そう言つて人のいない道を歩いて、何処か身を隠せそうなどを探す。

しばらく歩いてると、工場が見つかった。

しかし・・・後ろから何かが来る気配がした。

きつと警察・・・

『一人は遠回りして、先に行つて。あたしはその間警察と鬼ごっこするから』

少しだけ楽しそうに言つと、二人は不思議そうに顔を見合させてから、頷いた。

一人が行つたのを見送ると、声をかけた。

『國島刑事ですか？』

『君はいつもすぐに逃げないけど・・・もしかして遊ばれてるかな？』

國島刑事は少しだけ嫌そうな顔をした。

『だつて・・・至近距離からでも逃げる自信あるから』

あたしが自信満々に言つと、國島刑事は溜め息をついてから言つた。

『君みたいな子がどうして強盗何かを・・・何か理由があるんだろう？僕に話してみて』

國島刑事はマダあたしのことを信じてるんだ。

きつと施設の奴等はこう思つてるだろ。

くどうとう問題を起こしたかゝつて・・・

誰もあたしのこと何か考えてくれなかつた。

『理由何て・・・ないよ』

ただ誰かに見てほしかつた。

誰かに叱つてほしかつた。

あたしは大切な一人の人間だつて、誰かに思つてほしかつた。

『じゃあ、どうして強盗何かしたんだ？』

『それは・・・』

國島刑事はあたしのことをわかつてくれている。

理解しようとしてくれてる。

『國島刑事みたいに・・・國島刑事は、あたしのこと好きですか？』

『へつ？何の話しだ・・・』

國島刑事は少し驚いた後、恥ずかしそうに言つた。

何でそんな反応するの？

『冗談ですよ。でも・・・もしもあたしが國島刑事のこと、好きだつて言つたらどうします？』

どうしてあたしはこんなことを・・・

國島刑事のことが、好きなの？

そんなこと・・・

『大人をからかうもんじやない』

國島刑事は我に返つたように、怒鳴り付けた。

あたしはそんな國島刑事の態度が気に入らなかつた。

『つまんない』

吐き捨てるように言い、走つた。

國島刑事は直ぐに追つて来なかつたのか。

後ろから人が来る気配はなかつた。

そして工場に向かうと、中には二人いた。

『愛も合流出来たんだ』

『元々あたいはここに居たんだよ』

『そつか』

あたしは疲れたようにその場に座り込んだ。

『大丈夫か？』

愛が心配そうに覗き込んでくれた。

『しばらくは見つかねえと思つから、少し休め』

『ありがとう』

あたしは端っこに行き、身を丸めるよつにして横になつた。  
疲れたんじやない。

否、実際にだいぶ疲れてはいる。  
でも、それだけじゃなくて・・・

少し眠つていたみたいで、皆も眠つていた。

ただ一人『凪那さん。あの・・・話したいことがあります』  
幸子だけは起きていた。

『何?』

工場の奥に行き、小さな声で話す。

辺りは暗くなり始めていて、奥に行くとほとんど何も見えなかつた。

『あの・・・皆さんが誤解していることがあるんですけど、実は・・・  
あの掲示板を書いたのも、お金を盗んだのもあたしじゃないんです』

『えつ? でも・・・』

確かにこの子があの時お金を持つて・・・

『あたしが行つたら、ちょうど覆面をつけた男一人がいて、あたし  
にお金渡して來たんです』

『どういうこと?』

だつて普通奪つたお金をこんな子供に渡すわけがない。

もしかして・・・仲間?

でも、それならこのお金誰にも使わせないんじや・・・

様々な疑問が渦巻く中、幸子は一言だけ言つた。

『はめられた・・・』

はめられた?

それつて、まさか・・・

嫌な予感がした。

背筋が凍るような・・・

『教えてくれてありがとう。もう寝たら

『はい』

微笑みながら言つあたしに安堵したのか、不安そうな顔が笑顔にな  
つた。

あたしは不安で、朝まで一睡も出来なかつた。

『あのせ、この場所しばらくながれだからだ。でも今日せこで大人しくしてよ。あたしちょっと食料集めてくる』

『それならあたいも・・・』

立ちかけた愛を手で制止し、あたしは一人で外へ出た。

いつもよりも周りに意識を集中させて、歩いた。

國島刑事・・・

会いたい・・・

『つて・・・あたしは、國島刑事のことが好きなの?』  
足を止めて呟く。  
誰に言うでもなく、自分に問いつぶつて呟いた。

『そんなわけ・・・』

そんな時、タイミング悪く後ろから足音が聞こえた。  
電柱に隠れながらよく見ると、刑事だった。

何となく雰囲気でわかる。

國島刑事ではないことから、あたしは相手の足音に耳を傾けながらゆっくりと歩いた。

そして十字路になつた所で、横の道に行き、走つた。

他の刑事とは関わりたくない。

その想いを胸に・・・

あたしはひたすら走つた。

もうとっくに刑事何ていないので、まるで誰かを探しているかのように、走り回つた。

そしてあたしは想いだしたように止まつた。

0 80 - 9987 - ..

昔國島刑事に教えてもらつた携帯の番号。

一回もかけた事なかつたのに、どうして覚えてるんだろ？  
<家族のことで何か話せることがあつたら、気軽に電話して>  
初めて会つた時に渡されて、それ以来会つていない。  
そんな番号思い出す何て・・・

あたしは公衆電話を探し出して、その番号を押した。  
昨日知った事実を伝えるべきだと思った。

そしたら、その犯人が捕まるんじゃないかつて・・・  
すぎるような思いで受話器を手にした。

『はい、國島です』

國島刑事の声が聞こえ、思わず受話器を耳から外してしまった。  
けど、ここで切つたらダメだ。

『國那・・・です』

『國那ちゃん！？どうしたの？』

驚いた様子の國島刑事に、少しだけ嬉しくなった。

『國島刑事に話しておきたいことがあって・・・』

そしてあたしは、昨日幸子に聞いたことを全て話した。

『そういうこと何だけど、警察はこんなことも掴んでないの？』

『それがね・・・』

『わかりました。調べといて下さい』

國島刑事の話によると、銀行員に話を聞いたところ、一人の少女が金を奪つて、店の外で仲間と合流した。

としか、言わないらしく、警察も疑問点はあつたが、それを信じてあたし達をマークしたそうだ。

犯人が口封じをして、あたし達に罪を被せた。  
それが國島刑事の推測だ。

國島刑事は上の人にこの事を伝えるつて言ってくれた。  
もう心配はないよね。

いつもより多めに置い、皆が待つ工場へ向かった。

だけど、かなり走ったようで、工場からは距離があった。

『荷物持つたから走れないな・・・』

溜め息混じりに言つと、少し足を早めた。

工場が見えてくる頃には、夕焼けが出ていた。  
皆お腹空いてるだろな。

安心しきつたあたしは、そんな軽い気持ちでいた。  
けれど、工場の中に入ると、そんな気持ちは一変した。  
中には誰もいなかつた。

『何で?』

思考が停止した。

何で、皆・・・

ここがバレるわけないのに・・・

工場を見渡しながら歩いていると、隅に紙が落ちてるのが見えた。  
それを拾い上げてみると・・・

みつかつた。逃げる。お前も一人で逃げる  
書きなぐつたような字が残されていた。

皆・・・逃げれたのかな?

突然不安が襲いかかってきた。

皆・・・

でも、國島刑事が言つてくれたはずなのに・・・

ピー・ピー、ピー・ピー

そんなことを考えていると、パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

『何で・・・』

『姫縞凪那だね。一緒に来てもらおうか』

『嫌、何で・・・』

中から数人の男性が出てきて、皆少し警戒したようにあたしを囲んだ。

『何で？強盗しただる。わあ、来なさい』

男はわざとらしく、優しい口調で言った。

『あたしじゃない・・・國島、國島刑事は？』

その問いに刑事さんは答えなかつた。

『柏木さん・・・』

後ろから女の刑事が、何やら男に話しているが、そんなことも視界に入らないぐらい混乱している。

裏切られた？

はめられた？

『そんなはず・・・そんなはずない。國島刑事は・・・あたしを・・・

・だつて』

頭を抱えながら、ブツブツ話すあたしに、刑事達は皆哀れみの目で見つめながらも、警戒はしている様子だ。

『國島刑事・・・』

何度も咳きながら、ある物に視点を合わせる。

『そつか・・・あたしは結局、誰にも必要にされないんだね』

涙を溢すと同時に、素早く柏木と呼ばれていた刑事の拳銃をとる。

『貴様！』

慌てて取り返そうとする柏木だが、それよりも先に拳銃を自分のこめかみに当てる。

刑事が全員一歩下がり、柏木の変わりにわっさの女の刑事が出てきた。

『銃を下ろしなさい』

『どうせあたしのこと何か・・・死んだつて誰も悲しまないよ』

涙で視界は歪んでいた。

目の前に家族が見えた気がして、あたしは笑顔で引金を引いた。やつと顎と一緒にいられる・・・



## 最終話

『お父さん、お母さん、誠・・・これからずっと一緒に』

『凪那ちゃん。凪那ちゃん・・・』

誰かが呼んでくる。

誰？

あたしはずっと家族と話していたのに、邪魔しないでほしいのに・・・

『凪那、いつできなさい』

『お母さん・・・』

『お姉ちゃん、いついらっしゃい』

『誠・・・』

何で皆そんなに笑顔なの？

『お父さん・・・』

『凪那、お前は何も心配しなくていい。いつできなさい』

『うん』

何で家族はこんなに温かいんだろう？

でも、温かい家族はもういない・・・

『凪那ちゃん。凪那ちゃん』

誰・・・

あたしを呼ぶのは誰？

『凪那ちゃん。良かつた・・・本当に良かつたよ』

『くにじ、ま・・・刑事』

あたしは・・・

『生きてる・・・の?』

『ああ、君は生きてる。瓶はここにいる。だから、もう一度とあんなマネはするな』

國島刑事の手は震えていて、逸らした顔にはきっと涙が流れていたと思つ。

『でも・・・あたしは、犯罪者。どうなつたつていいでしょ』

『君は、君は犯罪者じゃないよ。確かに君が金を運んだのは事実だ。だけど、君達ははめられたんだ』

國島刑事は・・・

『でも、貴方は裏切つた』

自分の胸に秘めてる感情が全て出てきたりで、少しだけ心の距離をおいた。

『あれば・・・すまない。君からの電話を貰つた時には、既に僕は上層部にマークされていたんだ。だから君との会話も聞かれていたし、そのことを信じようと、否・・・聞き入れようとしなかつたんだ。すまない。君を守りたかったのに・・・』

『守りたかった?』

『どうして、あたし何かを・・・

それに・・・

『どうしてあたしは生きてるの?』

『君はずつと眠つていたんだ。一年間も・・・何度も手術を繰り返して、ようやく今意識が戻つたんだ』

『一年もずっと眠つていたんだ・・・

その間ずっと國島刑事は・・・

『國島刑事はあたしのこと、最後まで信じてくれた。そんなんだね』

『まあ、ああ、そうだな・・・』

國島刑事は恥ずかしそうに言つた。

その仕草が余計に嬉しかつた。

あたしを心配してくれている。あたしを大切だつて思つてくれる。

そんな人があたしの前に現れた。あたしは生きていいんだね。胸

をはつて生きてていいいんだよね。

その後2ヶ月後に、あたしは退院することが出来た。  
一緒に逃走した仲間達は、一度は少年院に入ったものの、真犯人が  
見つかることで、数ヶ月で出してもらつことが出来た。  
お互いに名前しか知らなかつたあたし達は、それから先一度も会つ  
ことがなかつた。

きっと皆それに新しい道を歩んで、過去には振り返りたくなか  
つたのかもしれない。

だけど、確かにあたし達はあの時とても楽しかつた。

あの感情だけは誰も忘れることがないだらう・・・

あたしはそれから、刑事を田指す為に一生懸命勉強した。  
いつか國島刑事と渡り歩ける日が来ると信じて・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4808y/>

---

大切な存在に

2011年11月17日18時44分発行